［史料紹介］

近世の世喜宿城絵図について

中村正己

はじめに

本稿は、千葉県立関宿城博物館の一九九六年度企画展「描かれた世喜宿城」（城絵図世界）図録中より、近世「世喜宿城之図」の考察を試みたものである。本史料は、当時関宿町教育委員会（現野田市教育委員会）によって実施された終戦内閣総理大臣鈴木貫太郎遺品調査によって発見され関宿藩最後の家老職の一人であった父鈴木為輔（号由哲）が子の鈴木貫太郎に残したものと伝えられている。

一　近世の主な関宿城絵図面について

近世の関宿城絵図面として、所見されるものは十七葉存在する。その内、本稿で取り上げた城絵図の他に主な城絵図については次のようなものがある。最も古い城絵図は、江戸中期以降に編集された「主図合結記下総国関宿」である。縄張図の形態をとるもので、利根川（逆川）と内濠に囲まれた主郭の本丸、二ノ丸、三ノ丸の配置が示されているが、門と橋以外の御三階櫓等の建物は描かれていない。本丸東の門前と二ノ丸北側に「士屋布（敷）」と書かれた家臣の屋敷が示されている。四カ所の濠に長さが（百三十九間、七十八間、七十五間、七十三間）と注記されている。延長百三十九間の濠は広さ二十二間もあった。土塁や濠や沼（蓮沼）で主郭内が区画されていたことがわかる絵図である

「主図合結記」は、江戸中期の尊王論者山県大弐（一七二五―六七）が兵学講義をおこなう資料として、諸国の城郭縄張図を収集したものである。後にその写しが大名、旗本家など不特定多数に広まったといわれている。[1]

「東海道諸城関宿城」（『製作年代宝暦二年―一七五二』岡山大学附属図書館蔵）は、岡山藩主池田文庫に収められている絵図で、付箋に記されている「久世讃岐守」は「久世広明」である。手法は前述の「主図合結記」と同様に描かれている。[2]

「諸国当城之図下総国関宿」（『製作年安永三年―一七七四　寛政十一年―一七九九』広島市立中央図書館蔵）は、広島藩主浅野家に伝えられたもので、藩主の軍学研修の用に供すべく作成されたとい

われている。利根川（逆川）を背にして本丸を取り囲むように二ノ丸、三ノ丸、発端曲輪、天神曲輪がある。大手門横の大沼は見られない。城下の寺院には朱色が施されている。また、本丸北の「三ケンヤ」（三軒家）には文字通り三軒の民家の屋根が描かれている。[3]

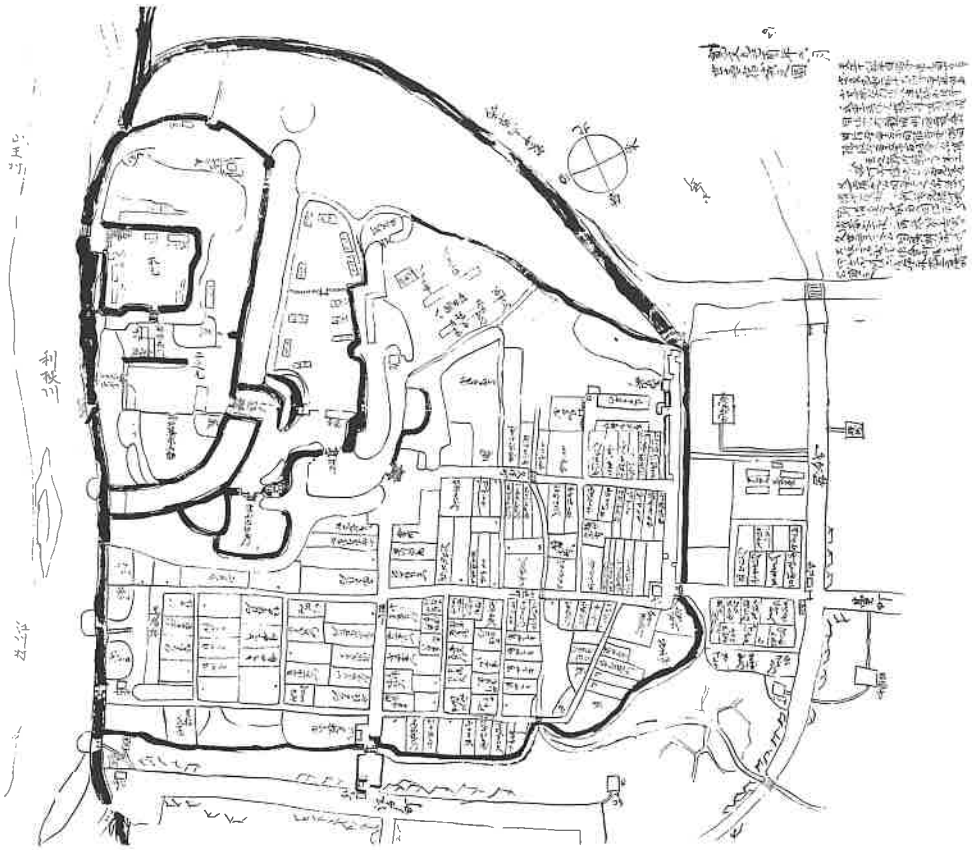
「下総国関宿城絵図」（『製作年慶應二年―一八六六』野田市関宿台町金竜院蔵）本絵図は、本丸、二ノ曲輪（丸）、三ノ曲輪（丸）、発端曲輪、北（天神）曲輪の名称が見える。また、大手門をはじめ各門の名称が注記されている。城内に比べ、城下町の家並などの描き方は詳細を極めているとともに、寺社名がほぼ漏れなく注記され、特に寺院には宗派も記載されている。また宗英寺の裏手に「晴氏ノ墓所」とあり、古河公方足利晴氏の墓所の位置が示されている。絵図東南の「御茶屋」は関宿藩が栽培を奨励した猿島茶の取引所と考えられる。絵図面西の江戸川入口には関宿関所とともに関宿棒出しが描かれている。[4]

表題によると元文二年（一七三七）の絵図をもとに慶應二年二月（一八六六）に塚本新、藤原勝邪の両名によって写したものである。

二　世喜宿城之図について

本図は墨書きで、形状は縦六十八・五センチメートル、横五十九・五センチメートルのものであり、絵図面中には寛文九年巳酉年六月と書かれ、その下に歴代藩主書として

「天正十八年松平政信因幡守康元同甲斐守忠良元和二松平大隅守重勝同五小笠原左エ門候政信北條出羽守氏重正保元牧野内匠頭信成同佐渡守親成明暦二板倉周防守重宗同阿波守重郷同隠岐守重常右板倉総城主之節御願之臺町御構込之由寛文九久世廣之公同重宗公御當代備中庭瀬被御所替元禄十牧野備後守成貞同備前守成春宝永二再参州吉田ゟ久世重之公同廣明公御代大坂ニテ御城地佐倉御城主堀田公



エ御預被成安永三廣明公領之」

とあることから、一体この絵図面が製作された年次はいつなのかと疑問が生じる。前述の本文末尾中により「廣明公御代大坂ニテ御城地佐倉城主堀田公エ御預被成安永三廣明公領之」と記されていることから、久世廣明は関宿藩主に襲封したのが寛延元年（一七四八）である。そして明和六年（一七六九）に大坂城代に就任するとともに、所領を河内国（大阪府）・美作国（岡山県）に移され、藩領は幕府預り地に、また関宿城は下総国佐倉城主堀田正順の預り地となる。後に廣明が関宿に復帰するのが安永三年（一七七四）のことである。従って、寛文九年（一六六九）の絵図をもとに安永三年以降に作成されたと考えられる。寛文九年の原図は、所在未確認である。

さて、図形の全体象を眺めてみると、城郭範囲は、本丸西隅に御三階櫓が描かれ、内濠の周辺には、本丸　二之丸、龍門　極楽橋門　埋門　城米クラ　エンショウ蔵　武具クラ　ハン所　天神　イナリ　厩　発端曲輪　会所　普請小屋　中間小屋　馬見所　風呂屋　藪クラ　足軽ナガヤ等が注記されている。絵図に描かれている極楽橋門の位置は、本来は本丸の東側で橋の長さは九間三尺、横幅二間二尺三寸であった。[5] 大手橋や橋詰門と称されていた門等は、極楽橋門と書かれた位置に存在されていたと考えられる。龍門（辰ノ門）は惣高四間四尺二寸。本丸内の城米クラ（米蔵）は桁行十三間、梁間二間他に桁行十六間、梁間二間各一棟が建てられていた。[6]

次に、津山治郎左衛門屋敷地の北側に位置する門は「佐武門」（注記無し）と思われる。また。埋門の東側に描かれている門名及び志賀八右エ門屋敷地の北側に描かれている門名はわからない。

各種武器の管理棟については、桁行二間　梁間九尺のエンショウ蔵（煙硝蔵）が在る。武具クラ（蔵）は、桁行八間、梁間二間半の建物であった。[7] 両蔵内には、玉（弾）薬箱六荷。硝煙二百八十貫五百目、鉄砲（玉目三匁五分）百二十挺、鉄玉一斗、木綿火縄五百筋、竹火縄五千五百筋、弓（但黒塗籠藤）六十挺、具足五十領、番具足百五十領、長柄三百五十筋等の軍事用の武器が備え付けられていた記録もみることが出来る。[8]

弾薬箱（玉薬箱）
寸法　長さ57.5cm×高さ51.00cm×奥行き45.00cm
右上に「ホーウト弾薬」、左下に「関宿大筒方」と朱書あり　千葉県立関宿城博物館寄託・個人蔵

二ノ丸内には天神（天神様）、イナリ（稲荷様）が祀られていた、稲荷様は関宿城の鬼門除けとして城郭内に存在していたものと考えられます。天神様は、明暦三年（一六五七）江戸大火の復興のため久世広之は幕府より普請総奉行を命じられた。その時江戸繁栄のため亀戸天神を建立する。後に広之は関宿に戻り、関宿城の鎮守として祀り、二ノ丸に社を建て天神郭としたと伝えられている。[9]

城下町範囲は外堀の内外に九十余名の家臣団屋敷地に姓名が記されていることが、この城絵図の特色である。区画は大小様々で不整形な地もある。別表は家臣団屋敷地に書かれている藩士の家禄・役職名等について整理した資料である。この資料から考えられることは、城郭周辺は家老や城代の職を勤めた下河辺次郎太夫、加藤求馬助、津山治郎左衛門は大きな屋敷地が与えられた。家禄二百石で給人、関宿勝手に召し抱えられた池田左五右衛門は三区画の屋敷地を持ち、家禄千石を領した下河辺次郎太夫並びに加藤求馬助両名は二つの屋敷地を持っていた。加藤求馬助の家禄は二百五十石であった。

更に馬役二十人扶持の高橋五郎兵衛の屋敷構の一部に厩が存在し

ていた。大手門（注記無し）の右側には家禄二百八十石で御広間番、旗奉行の三浦弥左衛門と家禄二百石で物頭役榊原儀太夫。左側は幕末に勤皇・佐幕の対立によって関宿藩を脱藩した、中老職、家禄三百石丹羽十郎右衛門の住居が配置され、三名共に大変重要な位置に住んでいたこがわかる。他に寛文十一年（一六七一）御三階櫓（惣高さ九間五尺七寸五分）大改築時の（作事）奉行角田作左（野）エ門、中川甚五（左）衛門　大工頭平井太郎兵衛（太左ェ門）の屋敷構が存在していたことについても興味深い史料である。

次にカラ掘　土取場、馬場跡、ユン小屋、行人馬、ハン所、札場、苗木畑、藪、アタコ、槍師等が書かれている。また、大日（大日様）、アタコ（愛宕様）、光覚寺（光岳寺）、昌福寺、神所（香取神社）の神社仏閣と江戸町、納谷町、臺町、小姓町、久保丁（町）の地名がみられる。町並は屋根が描かれているのみである。

城全体の総面積ついては、約三万一千四百五十坪（十・四ヘクタール）でその内、本丸、二ノ丸、三ノ丸の面積は約一万四千坪（四・九ヘクタール）あったとされている。[10] この広大な城地は、水源地に恵まれた赤掘川、利根川そして江戸川、逆川の舌状台地に配されていた。

おわりに

以上「近世世喜宿城絵図」の紹介を中心に、城絵図にはどのような施設が設けられ、規模的にはどのようなものであったか、さらに城下町の家臣団屋敷地と藩士の家禄、役職名等関係について述べてみたが、全体的に研究不足のため、他の近世関宿城絵図との比較検討ができなかったことについては今後の検討課題である。

【註】

（1）～（4）『平成八年度企画展描かれた世喜宿城』（一九九七年　千葉県立関宿城博物館）

（5）～（8）『関宿城歴史資料調査報告書』（一九八六年　関宿町歴史調査団　関宿町教育委員会）中、第四章「中鶴家文書について」（文責林保）

中鶴家文書（竪冊、千葉県立関宿城博物館寄託・個人蔵）の内容は、第一章久世家御略系及び関宿城の規模について、第二章諸役軍令記録、第三章出陣の際の人数・旗指物・武具・服装時の記録、第四章城内備付の武器・兵糧に関する記録、第五章防備の方法及び城下領民の取扱い方、第六章防戦の記録、となっており、以上の記録は、寛文期（一六六一）より寛政期（一七八九―一八〇一）に至るまでのものである。

（9）『関宿町史跡案内第三集史跡案内』（一九九五年　関宿町教育委員会）

（10）奥原謹爾『関宿志』（一九七三年）

【参考文献】

『関宿城歴史調査報告書』（一九八六年　千葉県教育委員会）
中村正己『関宿世禄の記』（一九九九年）
『国史大辞典』（一九七九～一九九七年　吉川弘文館）

（なかむら・まさみ　当館客員研究員）

別表　関宿家臣団家禄・役職名等表

NO	藩士名	生国・家禄・役職名等
1	下河辺次郎太夫	本国常陸　千石　家老
2	加藤求馬助	本国武州　二百五十石　城代
3	津山治郎左衛門	五十人扶持　城代
4	小柴内蔵助	二百四十石　元締役
5	原与左衛門	三百石　物頭
6	塙安右衛門	百石　城番
7	酒井源太左衛門	二百石
8	松澤十右衛門	
9	松田彦左衛門	米五十俵三口　代官
10	大の新兵衛	百石
11	田ヤ作左衛門	
12	友田弥一右衛門	二百石　物頭
13	浅田七郎左衛門	百石　広間（敷）
14	森平佐五右衛門	本国上野　二百石　鎗奉行
15	渡瀬武太夫	百石　目付役
16	大八木九郎左衛門	二百石　物頭
17	丹羽十郎右衛門	本国三州　三百石　用人　鎗奉行　旗奉行　物頭
18	牧田平左エ門	
19	小倉四郎右衛門	
20	福置吉兵エ	
21	石原三右エ門	
22	富田又右エ門	
23	高橋五郎兵衛	本国武州　二十人扶持　馬役
24	早川甫庵	二十人扶持
25	池谷権右衛門	二百五十石　物頭

NO	藩士名	生国・家禄・役職名等
48	下枝吉太夫	
49	藤田与五左衛門	本国近江　二百石　鎗奉行
50	小笠原勘（甚）右衛門	六十俵二人扶持　破損奉行　大納戸
51	戸塚伝左衛門	百石　給人
52	中田与右衛門	二百五十石　城代
53	玉江与五郎	本国播磨　百五十七石　元締格
54	小田部伊左エ門	百石　目付
55	福田宗有	
56	内藤五郎左エ門	
57	田中清兵衛	
58	加藤彦右（左）衛門	本国備前　二百石　鎗奉行
59	石塚安左衛門	百五十石　本所屋敷奉行
60	谷甚右衛門	本国下野　百石　大納戸
61	中村次右衛門	
62	古橋角右エ門	
63	中川甚五（左）衛門	
64	三曳八平	二百石　給人　使番寺社方
65	小嶋儀兵衛	
66	河合源五右衛門	本国相模国　二十俵二口　代官　小蔵
67	海津六郎兵衛	本国美濃　二百石
68	原与惣兵衛	八十俵二口　城番
69	平井太（左エ門）郎兵衛	百五十石
70	由岐又右衛門	三十俵六人　大工頭
71	村瀬所左衛門	本国阿波　百五十石　給人　元締役
72	友田弥一右衛門	本国備後　三百俵二口　小勘定組頭

26	池谷藤左衛門		
27	今泉国之丞		
28	野上平右衛門	本国備前　二百石　物頭	
29	寺田蔵人	二十人扶持　勘定頭	
30	三浦弥左衛門	本国安房　二百八十石　広間（敷）番　旗奉行	
31	榊原儀太夫	本国伊勢　二百石　物頭　旗奉行	
32	濱田十左エ門		
33	松野伊兵衛	米三十俵二口	
34	長谷川忠	金十両二口　医師	
35	渡辺半兵衛		
36	双（準）木惣兵衛	米五十俵二口　代官	
37	平岩久左エ門		
38	中嶋左太夫	二百八十石　寺社奉行	
39	中嶋久作		
40	渡辺太郎右衛門	百石　城番	
41	浅井五右衛門	本国三河　二百石　物頭　鎗奉行	
42	大坪久右衛門	本国相模　百二十石　亀井清左衛門取次役	
43	西川作太夫	百石三人扶持　目付役	
44	尾（小）幡猪右衛門	本国出雲　二百石	
45	加古長三郎		
46	山口与惣	本国上野　二百石　物頭	
47	花井加兵衛		

73	水野定（貞）右衛門	二百石　物頭　旗奉行	
74	石川清太夫	本国奥州　二百石　小姓　鎗奉行	
75	塚原縫之助	百石　徒士頭	
76	高嶋清助		
77	安井源左衛門	百五十石　大坂留守居	
78	濱田大印	本国出雲　二百五十石　元締役	
79	池田左近右衛門	二十人扶持	
80	志賀八右エ門	本国摂津　二百石　給人　関宿勝手	
81	瀧郷右衛門		
82	荒川角太夫	二百石　物頭	
83	山下半左エ門		
84	足立甚右エ門		
85	飯田長兵衛		
86	間瀬与次兵衛	百石	
87	新海儀左衛門	百二十石　城番	
88	伊藤孫兵衛	二百石　物頭	
89	高田五（弥五）兵衛		
90	大須賀縫左エ門	二百五十石　鎗奉行　物頭	
91	角田作左エ門		
92	栗澤助右エ門		
93	原四郎右衛門	本国美濃　二百石　給人　物頭	

利根川
江川村
行人橋
ハン所
足軽長屋
カラ畑
カラホリ
上馬場
エンショウ畑
津山治部左衛門
加藤求馬助
原与左衛門
小笠原内蔵助
松田彦左衛門
明ヤシキ
大の新兵衛
田中作左エ門
森平佐五右衛門
遠藤武太夫
丹羽十郎右衛門
八木九郎太
江戸町
佐々木恕左エ門
野上平右衛門
寺田嘉人
三浦弥右衛門
早川甚兵衛
池谷権右衛門
池谷嘉左エ門
今泉固之丞
戸塚伝左衛門
小田部伊左エ門
福田宗有
内藤五郎左エ門
田中源兵衛
高橋五郎兵衛
豊田小屋
中田小屋
塩品屋
足カル長ヤ
光寺
アシカル長屋
角太夫
流川
石川清太夫
足軽長屋
馬場
馬場町
新町
横町
馬場
馬場
馬場